
なないろ人魚

暁 礼加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なないろ人魚

【Nコード】

N7089H

【作者名】

暁 礼加

【あらすじ】

佐橋兄妹の住んでいる村の森の奥には神秘的な湖があった。いいつたえによると、なないろの人魚が住んでいるらしいが…?!

1話・人魚との出会い

俺が住んでいる村の奥には森がある。

その森の奥には、神秘的な湖があるらしい。

俺のおばあちゃんのいいつたえによると　その湖には七色の人魚がいるらしい。

夏――

「おい！雲杏くもんー！早く帰るぞ！」

「待ってーっ！お兄ちゃん早いよう。」

そう言いながら、森から帰ってきたのは佐橋さはいし兄妹。

いつもはしゃぎっぱなしの、妹の雲杏と、

雲杏にいつも無理やり連れて行かされる、兄の飛翔つはさ。

家に帰ってきた俺たちは、4つ切りにしてあったすいかを頬張った。

今はもうすでに夕方というより、夜。

今から出かけるには遅いという時間に事件は起こった。

ガタガタガタ…！！

「きゃっ、何…?!地震っ?」

「雲杏！ほら、こっち！テーブルの下に隠れないと！」

数秒後…地震の揺れはおさまった。

俺と雲杏はテーブルから出た。

ガチャン…！

扉が豪快に開く音がした。

「佐橋いー！佐橋っ！！」

「なんだよ…こんな地震の中…。もしかして…お前が暴れたのか？！」

「ちげーよ。つか、それどころじゃねーんだ！」

「あら、皆兎くん。^{みなと}どうしたの？」

「こんばんはっ。」

「で、なんだよ。」

「あつ、あの森の奥の湖…、なんか分かんねえけど、光ってんだ！」

「はあ？んなわけねーだろ。」

「本当だつて！お前も見に行こーぜ！」

「待って！雲杏も行くの！」

「雲杏は、家で待つとけ！」

「ええー…。んー、んじゃ、待つとく。」

「んじゃ、行つてくつから！」

俺と皆兎は外に出て森の方へと向かった。

「佐橋、あれだよ、あれ。」

皆兎が指したところには確かに光を放っている湖があった。

「おい…皆兎。本当だつたんだな…。」

「お前、嘘だと思つてたのかよっ?!」

俺は、返事も返さず、ただただ光に見とれていた。

「どうやら、さっきの地震は、あの湖の所^{せい}為らしいぜ。」

「俺ら以外に気付いた人はいねえの？」

「そつみただいな。俺らだけだっ。」

辺りを見渡しても俺ら以外は誰もいなかった。

俺は、光り輝く湖にそつと手をつけた。

すると、湖につけた手は誰かに繋がれた。

「えっ?!」

「ツ……ツバ……サ……」

「おっ、俺の名前？」

「私……は、風愛朱^{エアリス}。この湖の……人魚……なんだあ。」

「風愛朱……さん？人魚……？」

「そう……私は、この湖に……昔からいるの。」

「……ってことは……君がなないろの人魚なのか？」

「うん 私がなないろの人魚。ツバサは……知ってたんだね。」

「昔、おばあちゃんから聞いたんだ。」

「じゃ……私のこと、もっと教えてあげるね。」

1話・人魚との出会い（後書き）

風愛^{エアリス}朱が知っていた、なないろの人魚の秘密とは…？！

2話：人魚の秘密（前書き）

なないろの人魚に出会ったツバサ。なないろ人魚の秘密が解き明かされる――

2話・人魚の秘密

『じゃ…私のこと、もっと教えてあげるね。』
その言葉に俺は一瞬ドキツとした。

『私ね、人間と人魚の…ハーフなんだ。』

「へえ…すごいな。」

『生まれたときは普通の…人間だったから、普通に歩いてたの。』

「で、それから人魚に変わったのか？」

『うん。人魚になってからは、ずっと昔からこの湖にいたの…お母さんと一緒に。』

「お母さんも…一緒…だったんだね。」

『でも…誰かが…お母さんをどこかに…連れて行かれちゃったの…！』

「……………」

『それで、分からないけど…私は 封印されてたみたい。』

「で…、さっきの地震で封印が解かれたの？」

『そうみたい…ごめんね。』

俺は話す言葉がなくなった。

『えっと…言い忘れてたんだけどね…、私…あまり、人間に見られちゃ駄目って掟なの。』

「そうなんだっ。」

『でね…私、人間になりたいの！』

「えっ?! なれる…の?」

『うん…こうすれば…。』

エアリス
風愛朱は俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

彼女の唇はとても冷たかった。

「え…?」

キラリーン――…

エアリスは黄金に輝き、宙に浮いた。

「エアリスー!!」

その光は地上に降りてきた。

「会いたかったよ、ツバサ。」

「エアリスっ!大丈夫だったんだね。」

「えっと、さっきのは、人間になるためのね…儀式みたいなものなんだよ。」

「そうなんだっ!っていうか…その…キ…キス…//」

俺は、顔を赤くして言った。

「えへへっ。あれ、私のファーストキスだったんだよ。」

エアリスも顔を赤くして、照れを隠しながら言った。

「…俺も。」

「じゃ、一緒だね。」

「んで…えっと、これからどうするの?」

俺は迷いながら言った。

「うーん、どうしようかな…。」

「とりあえずさ…俺んち…来るか?」

「うんっ!行く!」

エアリスは初めてのように喜んだ。

(あ…皆兔を忘れてた。)

皆兔は後ろで、寝ていた。

「皆兔^{みなこ}も行くぞ!」

「お、おう!…あれ?その子は…?」

「え…ええっと…。」

「わ、私も、さっきの光で駆けつけてきたんだよっ。」

「そうなんだっ。俺らと一緒にだな。」

「う…うんっ。」

「じゃ、俺は帰るな。何もなかったみたいだし。」

「そっ、そうか。じゃなっ。」

（ふう…なんとか気付かれなかったみたいだな。）

「んじゃ、俺らも帰ろうか。」

俺が先に歩いて俺んちへと行こうとした瞬間――

どてっ！！

「きゃうっ！」

振り返ってみると、後ろではエアリスが転んでいた。

「エアリスっ？大丈夫かっ??」

「いたたたた…久しぶりに歩いたから、感覚が戻らなかったみたい。」

「んじゃ、負ぶってくよ。」

「ううん。いいよっ。私、ちゃんと歩けるようにならなきゃ駄目だから。」

その後も、エアリスは転んでは立ち、転んでは立ちながら、必死に歩いた。

（俺も、最初はこんな感じだったのかな。）

無事、家に着いたときには、エアリスの着ていた真っ白なワンピースは泥だらけになっていた。

2話・人魚の秘密（後書き）

人間になった、エアリス。これからどうなっていくのか――
…

3話・出発前夜

「お帰りなさいーい！」

一番に出てきたのは、雲杏くもあんだった。

「おかえりなさい。」

続いて母さんが台所から言う。

「ただいま。」

「あれえ??その、お姉ちゃんは？」

「はじめまして。私は風愛朱エアリスだよ。」

「エアリスちゃん！えっと…あたしは雲杏！」

「クランかぁ。よろしくねっ！」

「で…エアリスちゃんはどーしてここにきたのー？」

「ええっと…。」

「雲杏、エアリスはな、さっき湖であつたんだ。」

「もしかして…なないいいっ?！」

俺は、雲杏の口を塞いだ。

「まあ、俺の部屋へ行こうか。」

俺たちは、2階の部屋に上がった。

「ふうう…母さんに聞かれてなくてよかった。」

「で、エアリスちゃん、本当になないろの人魚…なのっ？」

「うん、そうだよ。あ、でも…ツバサと、クラン以外には言っちゃ駄目だよっ?」

「うん!…でも…どーして、エアリスちゃんは人魚なのに…。」

「人間の姿になってるからだよ。ツバサと誓い合っただよ。」

「へえー!そうなんだ!！」

「で、これからどうするんだ？」

「あ、そのことなんだけど…、私…お母さんに会いたい。」

エアリスは涙しながら言った。

「そうか…。俺も…手伝ってやるよ。」

「雲杏も手伝うよっ!」

「うん…ありがとう。」

「でも、場所とかも分かんねえし…。」

「それなら、大丈夫っ!私のペンダントがお母さんに近づいたら反応してくれるから。」

「そうなんだ。んじゃ、大丈夫だな。でも、これ以上、ここには居られないよな。」

「そうだよね…。」

「だから…俺達、旅に出よう!」

「えっ…ツバサも一緒に探してくれるの?」

「もちろんだよ。誓い合ったんだろ、俺ら。」

「そうだね。ありがとう。」

「んじゃ、エアリスちゃん、今日はもうこんな時間だから泊まっていてねっ。」

「うん。ありがとう、クラン。」

「じゃ、私はお風呂入ってくるね。」

「あ、私も入るっ!」

「うん、んじゃ…一緒に入ろっ!」

「うん!!」

エアリスは嬉しそうに雲杏に着いて行った。

お風呂にて――…

「あ、エアリスちゃん!脱いだものは洗濯機に入れてねっ。」

「はい!」

「んじゃ、先に入ってるね。」

「うん!」

エアリスは最後にペンダントを外し、中に入った。

ガチャッ！

「エアリスちゃん、はい、桶。」

「ありがと、クラン！」

ちやぷん…

「そーいえば、エアリスちゃんてさ、どうして、あの湖にいたの？」

「昔はお母さんと一緒に住んでたからだよつ。それから、ずっと封印されてたの。」

エアリスは寂しそうにいった。

「そつか…お父さんは？」

「…小さいときに見ただけで…全然知らないんだ。」

「お父さんも…その…？」

「ううん。お父さんは人間なんだ。」

「そつかあ、んじゃ…ハーフ？」

「うん、そつだよつ。」

「じゃ、そろそろあがろつか。」

「そつだね！」

雲杏は先にでて、バスタオルを取り出した。

エアリスが後に続き、バスタオルを受け取った。

ガチャッ…！

「あがつたよつ。だから、早く入ってね。」

「おうつ。」

部屋でひとり、ゲームをしていた俺は、スウェットを持って風呂場へと行った。

俺は、明日からのことを考えながら、湯船に浸かっていた。

ガチャ…

俺は、もう寝てるかもしれないと思い、静かにドアを開けた。
すでに部屋は真っ暗で、2人は寝ていた。

「明日から大変だし、早く寝ないとな。」

エアリスの横には布団が敷かれていたので、静かに入った。

「ツバサ…？」

しばらくすると、エアリスの声が聞こえてきた。

「ん…？」

「無理言つてごめんね。」

「いや…全然。」

「明日から頑張ろうね。」

「おうっ。」

そして、俺は寝た。

その日から、俺らは、他には秘密でなないろの人魚…エアリスと過ごすことになった。

3話・出発前夜（後書き）

ツバサ達は無事、出発できるのか?!

4話・秘密の夜明け

—— 次の日……

夜明け前は、人があまり外にいないから見つかりにくい。

俺は、その時間帯を目処にして準備をした。

「雲杏、お前は風愛朱エアリスを連れて、早く家を出ろっ。」

「うん！ りょーかいっ！！」

俺は家族あてに置手紙を書いた。

「父さん、母さんへ

俺と雲杏はしばらく旅に出ます。

何も言わず出て行ってごめん。

でも、絶対に帰ってくるからな。

飛翔つばさより」

こう書いた置手紙をテーブルの上にそつと置いた。

「ごめん…母さん。」

俺は気付かれないように静かに家を出た。

「ツバサー！ 早くっ！」

「あわっ、そんな大きな声出しちゃだめっ！」

「あっ、ご、ごめん…。」

（相変わらずだな…エアリスは。）

俺は、雲杏とエアリスが待っている場所まで走った。

「じゃ、行こっかつ！」

「そうだねっ！」

エアリスは、お母さんと会えるのがとても嬉しいらしく、ハイテン

シヨンだった。

「んじゃ…まず、この村から出ないとな。」

「あつ、待って！私ね…ちょっと寄りたいたいところがあるん…だけど…。」

「うん！いいよっ！そこに寄ってから行こっつ！」

「ありがと、クラン！ツバサも…いい？」

「俺は別にいいぜ。」

「ありがとっ！クランたちも行こっつ！」

「うん！」

「で…その行きたいところって何処なんだ？」

「えっと…もうちょっと！」

エアリスはそう言いながら、昨日までとはまるで別人のように颯爽と駆けていった。

昨日の今日でここまで走れるとは思っていなかった。

「エアリスちゃん！待ってえー！」

「雲杏、エアリスさ…昨日あんなに走れたか？」

「ううんっ！昨日は全然、走るどころか歩くのも一苦労だったぐら이었다よっ！」

俺の見間違いではないらしい。

「だよな…。」

俺たちは考えながら野原を走り下っていった。

やっと、エアリスに着いたとき…目の前には湖があった。

（エアリス…この湖で何かするのか…？）

「ツバサ、クラン…お母さん、私に会ったら喜ぶかな…？」

エアリスは、さっきまでとは別人みたいになっていた。

「エアリス…ちゃん…？」

「エアリス…。」

「私ね、封印されてから会ってなかったから…お母さんの顔、あん

まり覚えてないの。」

「そう…だよな…」

「だから、お母さん…私のことも覚えてないかも…」

「それはないって…！」

「でも、100%ではないから…絶対に覚えてるってことはないと思う…私でも。」

言葉をなくした…。

俺は、エアリスがこんなことを思っているなんか、思ってたから。

「だからね…私、お母さんに会うの…怖いんだ。」

「大丈夫だよっ！エアリスちゃんがお母さんを想っているなら、きつとお母さんもエアリスちゃんのこと、想ってくれてるよっ！」

涙目のエアリスに、雲杏は力強く言った。

「うん…そうだよな…。私、お母さんを信じる。」

俺は、落ちていたペットボトルに湖の水を入れた。

「エアリス…これ持って行こう…！」

そして、それをエアリスに渡した。

「え…これ…」

「うん、この水。思い出してくれることもあるかと思って。」

「そうだねっ。ありがと…！」

エアリスは涙を堪えながら、精一杯笑った。

俺は、その笑顔が忘れられなかった。

「じゃ、しゅっぱーっ！」

「おーっ！」

エアリスは、柔らかな笑顔に戻っていた。

4話・秘密の夜明け（後書き）

無事、出発した3人。

これからどうなっていくのか？！

5話・出口探し

湖の水を持って、再出発した俺たち。

「で…結局、どうするんだ？」

「うーん…何も手がかりもなかったら、どこに行ったらいいかも分かんないっ。」

「私の、ペンダントも反応しないと意味がないしね…。」

もしかして…俺ら…行く先がないっ?!
つまり…エアリスのお母さんを見つけることは不可能に近い…!!
まあ、諦めるのはまだ早いよなあ…。

「お兄ちゃん…もう、諦めようとしてるでしょっ!」

「…んなことねーよっ!」

図星…しかも妹に。

「あははっ。そういえば…この村の出口ってどこにあるの?」

「どこだったっけっ?お兄ちゃん知ってる?」

「俺も知らねーな…出たことなかったし…。」

「そっか…じゃさ、まず…この村を出ようよっ!」

「そうだねっ!」

「だな。えっと…北は家ばっかで行けないから無しで…南はこれ以上いけないし…。」

「じゃ、西か東なんだねっ!あ、ちよつと待ってね。」

エアリスは、再び湖に戻って何かを取り出してきた。

「それ何なんだ?」

「魔法誓約書だよ」まあ、簡単に言うと…魔法の呪文とかが書いてある本だよ。」

「わーっ!すごいねっ!」

「エアリスはその…魔法とかって使えるのか?」

「うんっ!だから、今からその出口が見つかる魔法を使うんだよっ。」

「

「んー？どれどれ…？」

その本には、筆記体がずらーっと並んでいて俺にはとうてい読めなかった。

「…お前はこれが読めるのか？」

「これぐらい読めないと、駄目だって、お母さんに言われたからね。」

「早く早くっ！やってみてーっ！」

「うん…！」

エアリスは、その魔法書を開いて、言葉を探し始めた。

すると、勢いよくめくっていたページの手を止めた。

どうやら、見つけたようだ。

すると、息を吸って口を開けた。

マーメイドフォースエクジツト！

あまり、意味は分からなかったが、魔法は上手くいったようだ。
出口がある方が光ったからだ。

「わああっ…！」

「えへへ…。」

「こんな光って大丈夫なのかっ？」

「私たちの他に、見えないはずだから。」

「じゃ、湖を光らせたのもエアリスなのか？」

「うん！そうだよっ！決められた人しか見えなかったはずだから…」

あまり人、来てなかったでしょ？」

「そうだったのか…っつーことは…、皆鬼みなとも見えてたはずだけど…。」

「あ、もしかしてツバサと一緒に湖に来てた子のこと？」

「うん…そうだけど。」

「あの子の記憶は消したから大丈夫っ！帰るときも寝てたでしょ？」

「あー！そうだったのか…！」

「うん。私が決めた人の中に入ってなかったはずなのになあ…なん
でだろ？」

「まあ、いいじゃんっ！出口の方行こっ」

「そうだねっ！」

そして、俺たちは、なんとか出口を見つけることが出来た。

しかし…その、出口の門の前には、門番が立っていた。

5話・出口探し（後書き）

次話、ツバサたちは無事出口を抜けることができるのか！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7089h/>

なないろ人魚

2010年10月18日10時08分発行